知っておきたい 目のトラブル

［執筆者］
島﨑 潤 しまざき じゅん
赤坂島崎眼科 院長
1982年慶應義塾大学医学部卒業。1985年済生会神奈川県病院眼科、1987年ボストン大学およびEye Research Institute of Retina Foundationに留学。1992年東京歯科大学眼科講師、1999年同大学眼科助教授、2006年同大学眼科教授。2023年赤坂島崎眼科院長、東京歯科大学名誉教授。

第２回

白内障は、手術のタイミングと眼内レンズ選択がポイント

白内障は眼球のレンズの役割を果たす水晶体が混濁する疾患で、通常加齢とともに進行する。60歳以上の半数以上が罹患しており、非常にポピュラーな疾患である。症状としては、混濁の位置と程度によってかすむ、まぶしい、暗い所ではっきり見えない、などさまざまである。生じた白内障を減らす薬は存在せず、「症状が気になるようになったら手術」というのが現在の考え方である。

白内障の手術は、角膜（黒目）と強膜（白目）の境目を２～３mm切開し、そこから細い器具で濁った水晶体の中身を除去し、その後に眼内レンズを入れる（図）。局所麻酔で10～20分くらいの手術で、多くの施設では外来手術として行っている。この20年ほどで白内障手術の安全性は格段に向上し、それにしたがって早い時期から行われるようになった。現在では年間約150万件の白内障手術が行われるようになり、これはすべての手術の中で最多である。

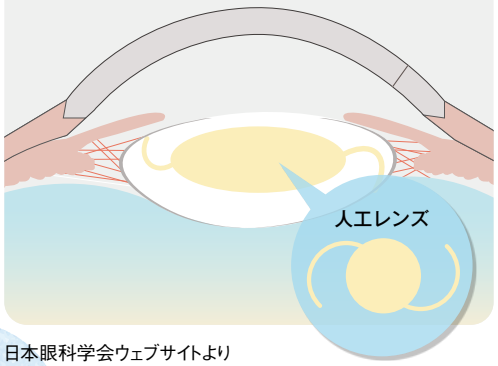
しかし手術の容易さは症例によってまちまちであることには留意する必要がある。

特に①非常に進行した例②糖尿病合併例③水晶体を支える組織が脆い例（前立腺肥大の薬を内服している場合に多い）④散瞳不良例⑤強度近視⑥ブドウ膜炎など他の眼疾患の合併例――などでは合併症のリスクが高い。手術前には自分の場合のリスクの高さについて聞いておくべきである。

もう一つ手術に際して考慮すべきなのは、眼内レンズの選択であり、①ピントを合わせる距離②単焦点レンズか多焦点レンズか――という２つのポイントがある。眼内レンズの度数を調整することで遠くをよく見えるようにするか、近くにピントを合わせるかなどの選択が可能である。一般的には、もう片方の目や、手術前の屈折状態を参考に決めるが、自分にとってよく使う距離に合わせることも重要である。

もう一つの多焦点レンズの話はさらに複雑である。これまでは、ほぼ一定の距離にピントを合わせる「単焦点レンズ」で、そこから外れた距離のものを見るには眼鏡の助けを借りる、というのが一般的であった。しかしながら最近、遠くと近く、さらには中間距離にもピントが合う「多焦点レンズ」が開発され、その施行件数も増えている。いろいろな距離に合う方が便利なようだが、例えば遠くに合わせた単焦点レンズと比べると、多焦点レンズの見え方はやや劣る。見え方の質よりもなるべく眼鏡なしで見たい、という人に多焦点レンズは向いている。さらに多焦点レンズにもさまざまな種類があり、保険でカバーできるもの、通常のレンズとの差額を負担するもの、全額自己負担になるもの、といった違いがある。施設によって取り扱いレンズも異なるので、ご自分の希望を整理した上で主治医とよく相談することをおすすめする。

図 白内障の手術



日本眼科学会ウェブサイトより
https://www.nichigan.or.jp/public/disease/treatment/item01.html